



Title	エプロン姿の主婦も参加：公衆衛生学会参加の記
Author(s)	浅利, 喜美子
Citation	大阪公衆衛生. 1969, 23, p. 29-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84364
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

岡山市で第27回日本公衆衛生学会開く

第27回日本公衆衛生学会は10月28日から3日間、岡山市で開かれ、全国から関係者4千人が参加、最近問題となっている人工甘味料チクロ、防腐剤などの食品添加物問題をはじめ、当面する公衆衛生の諸問題について、シンポジウム、研究発表などが行なわれた。

3日間にわたる学会は市内6会場における各分科会の盛り上がったふんいきによって、今年を中心課題「地域開発と公衆衛生」の成果をあげた。

なお、次の学会は愛知県で行なわれることに決まった。



エプロン姿の主婦も参加

—公衆衛生学会参加の記—

大阪市東成保健所 浅利 喜美子

学会とは「参加する事に意義あり」とばかり勤務に心を残しつつ公害の大阪を逃れ、2時間で岡山駅到着。歩いて行けますよ、の言葉にメインと覚しき大通りをスタコラ。道幅の広い事、歩道は特にばか広い。人口36万が、ほぼ大阪と同じの市域に住んでるんですもの、人も車も少なくてのびやか。都市化もこの程度が限度でありたいものと痛感。コートにカメラ、小脇に大封筒を抱えた人種を学会人と見て後に続く案の定、総会会場たる市民会館へたどり着く。

今学会のトピックは何と言っても総会のゲバと「森永砒素ミルク」の発表の二つ。約1時間遅れて総会セレモニーの幕が開く。と思う間もなく会場右前方から数人が口々に「ナゼ私服を会場に入れたんだ」「赤木、お前はな、よくも出て来れたな」「われわれの要求をどうしてくれるんだ」……何事が起こったのかと耳をそばだてれば、赤木会長への悪口雑言。バラバラとカメラを持って走りよる報道陣。あゝそうだ、中止になった学会もあったっけと思う。雑壇の人物が幾分狼狽気味に一瞬席を乱す。罵声とセレモニーの不協和音は学長挨拶、来賓祝詞、総会議事の間中奏でられる。聴衆一いや私の心はその二重奏の不愉快さに耐えかね血圧が上がる。「ドンナ顔シタ奴ナンダロ」「ツマミ出シテヤリタイ」「傍ノ連中、ナゼ然ラセナンダロ」……これはわが心の声。

不思議にも聞きとりにくくて意味の分らない議事のくぐり毎に、盛大な拍手が起こる。私も妨害に負け

てたまるかやけに拍手を送る。とまれ前代未聞、現代当然の景をなした総会は、反動分子の親玉「青山某」の私見演説10分にまばらな拍手でけり。その拍手の一つが私の席のすぐ後でおこる。みめうるわしき女性だった。彼等の言い分は、「赤木如き非民主人を学長にいただく事は学会の民主化も公衆衛生活動の進歩も阻害されるから辞任せよ。学会は会員たるわれわれの要望を無視するのはけしからん」ということ。この主張に共感出来ぬのはお年のせいかいなとちとさみしい。

森永砒素ミルク14年後の訪問についての発表は勤務の為帰阪したので聞けなくて残念。でも人の話や新聞を読んで思う事は、学会の場はもっと神聖でフェアプレーの重んじられる雰囲気であってほしかった。

学会もマンモス化して、会場探しは地元の苦勞が大きいが、食品衛生はカバヤ、栄養関係は農業会館等、分科会の中味と対照の妙をなしている。赤木会長が「公衆衛生は市井の人々のものであり学会はすべての人の参加を望む」と述べられたように、エプロン姿の愛育委員さんが熱心にメモしている風景もほほえましい。シンポジウム会場が繁盛しているのは問題点の究明を期待する公衆衛生従事者の真摯な姿とみるが、学会雑誌の原稿通りの朗読があったのには失望。でも「公衆衛生行政の近代化」なるシンポジウムの終りの討論の中で会場から声あり「現場ではコンピューターより厚生省の紙きれ一枚の方が偉力あり」と。ああ悲しき乎。「恩師は常に「保健所は役所らしからぬ役所でないといけないうだよ」と言われた」との演者の発言がなければ救われないうところ。こんなの聞けるのが学会出席の意義なのかもしれない。